

ノエミ・レーモンドの 建築と意匠

和で紡ぐモダンライフ

Noémi P. Raymond's Architecture and Design:
Inspired by Japanese Aesthetics





ノエミ・レーモンド無言の輝き

西洋近代建築と日本の伝統美を融合させた先駆者として、アントニン・レーモンドは、戦後日本建築の発展に貢献したとし、広く認識されている。しかしながら、妻であるノエミ・レーモンドの功績はこれまで十分に語られていない。

アントニンとノエミは、1919年の年末に初めて来日し、木造家屋が軒を連ね人々が行き交う往来を見た。アントニンは、その風情を自然と衣食住のすべてが調和していると称え、そこに近代建築の原理を見たという。開放的な日本家屋は、自然の移ろいそのものを感じさせ、そのすべてがノエミの感性にもマッチしていた。ノエミの関心は、陶芸、織物、竹細工、和紙と工芸の分野に及び、日本の職人の技巧の素晴らしさがノエミを驚かせた。

本展は、ノエミの実像を知るわずかな人が残す、記憶の足跡をたどる旅となった。

ノエミの助手であった小林邦子氏は、「大丈夫よ、あなた方は良い仕事をしているのよ」と所員に声をかけ、忙しい日常をねぎらうノエミの優しさを覚えている。また、札幌聖ミカエル教会の設計担当であった梶本尚揮氏は「戦後の日本の惨状に心を痛めたノエミ夫人が、資材の乏しい中、丸く薄い銀板を曲

げて数珠つなぎにした首飾りをデザインし、孤児院や教会等に寄付活動をされていたことを知ってほしい」と語る。そして「軽井沢の夏の家での仕事終わりにご夫妻と夕涼みの散歩をご一緒したときに、スキの穂を摘もうとすると、ノエミさんが『植物でも無駄に命を取ってはなりません』と言われました。私は、その言葉を今でも大切にしています」と言う。

一方、山形緞通（オリエンタルカーペット）の発注ノートには、糸色に関する細やかな指示が残されている。それらすべてに、彼女の光や色に関する感性の鋭さを感じる。

そうした証言の他、戦前にレーモンド・ファームに呼ばれた吉村順三や、その間、東京事務所を支えた杉山雅則と交わした書簡も、重要な資料となった。日米間の戦争という激震がどんなにか彼らの仕事に影を落としたことだろう。しかし、今なおレーモンド建築は、各地で継承され静かな輝きを放つ。

ノエミの美的感覚と日本の伝統美の融合は、モダンデザインの発展に確かな足跡を残している。自らの才能はアントニンの影におきつつも、実は主体的で創造性豊かな業績を残した彼女は、日本のモダンライフの始まりにおいて、かけがえのない存在であったと思う。本展がそのことを知っていただく機会となれば幸いである。

岡部三知代
ギャラリーエークウッド館長

フランスやスイスで子ども時代を過ごし、10代になる頃ニューヨークに移住、大学卒業後はイラストレーションやグラフィックデザインで身を立てたノエミ・ベルネッサン・レーモンド（1889-1980）。彼女は、チェコ出身の建築家アントニン・レーモンドと結ばれたことで建築の道へ入り、彼と共に来日した1919年以降、合わせて40年ばかりの歳月を日本で送ることとなる。

ノエミは、日本に根ざしたあらゆるもの——民家などの建築のほか、和紙や織物といった各地の手工芸や、高度な職人の技術、東洋哲学、自然崇拝など——に共鳴した。そして、自身がヨーロッパやアメリカで培ったデザインの感性と、日本の暮らしの随所に息づく伝統美を紡ぎ合わせて、独自のスタイルを生み出していく。その仕事はつねにアントニンとの協働であったが、いわば「二人で一つ」の関係性で半世紀近くを歩み、建築とインテリア、家具やテキスタイル、造園と、すべてがしっかりと調和した「総合芸術としての建築」をつくり上げたのだった。

ノエミの中には、まぎれもなく「和」が息づいていた。「和」は「日本」であり、「調和」であり、「人の和」でもあった。濱田庄司をはじめとする民藝運動の中心人物たち、芸術家や思想家など、彼女が親交を結んだ人々は数知れない。

この一冊は、そんなノエミの「建築と意匠」の仕事に目を向け、建築からインテリアまでを手掛けた住宅作品に光をあてる。建築の創造のみならず、そこで営まれる「モダンライフ」を「和」をもって美しく紡いだ——そのスタイルのある仕事を、いまこそ見つめ直したい。



左・ノエミがデザインしたファイヤードッグ（暖炉の薪置き）は、その名にちなんだ造形（所蔵：北澤建築設計事務所） 右頁・左上から時計回りに／茶道をするノエミ／帝国ホテル「孔雀の間」のための装飾習作（所蔵：北澤建築設計事務所）／ステンシルとスクリーンの作品（所蔵：Raymond Family, New Hope, Pennsylvania）／建設現場に立つ／三角椅子（22頁参照・所蔵：レーモンド設計事務所）／旧カニングハム邸（12頁参照）。1997年撮影。



1章 レーモンド建築の作風

こうがいちょう
斧町の自邸・事務所
(1951年・東京都港区)

上・藤棚の下に設けた石貼りのパティオ。晴れた日は食卓を置いて食事を取り、雨の日は左手にある居間に食卓を移動させた。下左・南側外観。中央にパティオがある。下右・主寝室を兼ねた居間。2台のソファベッドを造り付けて、夜はベッドとして使った（24頁参照）。



ノエミとアントニンが協働してつくり上げたレーモンド建築から、ここでは三つの住宅建築を紹介する。
その作風は戦前から次第に変化したものの、戦後に建てた斧町の自邸・事務所が、のちのスタイルを決定づけた原型とされる。
「正直さ、率直さ、単純さ、特に経済性を取り込むことができた」
後年、そうアントニンが自伝に綴った建築には、どのような工夫が凝らされていたのだろう。

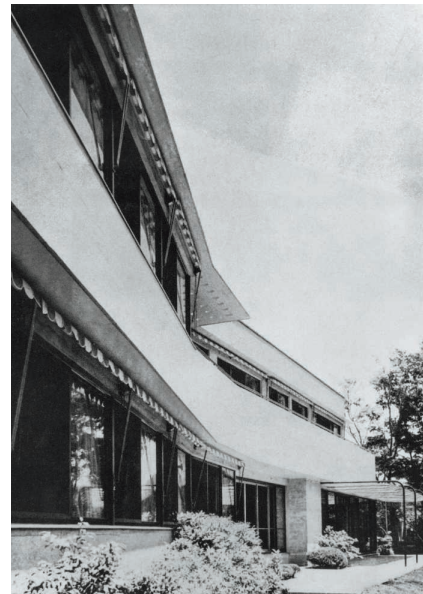
木造平屋建ての2棟を、中庭を挟んでコの字型につなげた構成。戦後の資材不足の中で職住一体の建築をつくろうとしたとき、アントニンが目につけたのが、建築現場で使われる細い足場丸太だった。考えついたのは、半割にした足場丸太を鉄状トラス（シザートラス）に組み、梁を突き上げるようにして支える手法。構造材を現しにし、仕上げも施さず、簡素で直裁な空間とした。また、柱の外側に建具を配置する「芯外し」の手法によって、建具を自由に動かして開口部を大きく開放できる。居間とパティオは床の高さを揃え、間の引き戸を開け放つと、内外の空間はひとつながりになる。内外を視覚的につなげるのは日本建築の特色だが、夫妻はこのパティオで食事を取り、庭の自然に触れることを喜びとした。庭に設けたプールでノエミは毎日泳ぎ、所員が泳ぐこともあった。暮らしと仕事の両方を大切にした、二人の生活哲学が伝わってくる。

現存せず、一部は移築された（21頁参照）。



上・事務所の居間。鉄状トラスが梁を支え、天井は張らず、構造を現しに。襖の風合いや障子から差し込む光が温かみをもたらしている。レーモンド建築でおなじみの金属製の暖炉がある。下・製図台が並ぶスタジオ。

あかほしつゑ
旧赤星鉄馬邸
(1934 年・東京都武蔵野市)



上左・螺旋の造形が印象的な階段室。
すぐ上に主人の赤星鉄馬の書斎があっ
た。上右・夫人室から和室を見る。右
手は大きな鏡の映り込みで、奥に連な
る子供室の様子を確認できる工夫。世
話をしやすい動線でもあった。下左・
コンクリート打ち放しの外観。以上 3
点の写真は 1934 年頃の撮影。



レーモンド建築におけるコンクリート住宅の代表作。施主は親交のあった実業家の赤星鉄馬で、アメリカへの留学経験を持つ。そんな施主にふさわしい和洋折衷のインテリアとし、洋室には折戸を多用して融通性を高め、続きの和室と洋室は障子や襖を用いて調和させた。鉄筋コンクリート造 3 階建てで、くの字型に少し曲がって伸び、庭を包み込むような形状。南側 2 階の横連窓には、当時試みていた「芯外し」の手法を活用した。1 階の開口部も芯外しとし、開け放つと室内と庭がひとつつながりになる。家具や造り付けの収納、カーペットなど、ノエミによるトータルなインテリアデザインは、当時の日本では新しい試みだった。T 字型につながる木造の別棟があり、ここには使用人室などを集めた。

鉄筋コンクリート造のみ現存。2022 年に国の登録有形文化財となり、武蔵野市が保存活用計画を始めている。

軽井沢の新スタジオ

(1963 年・長野県軽井沢町)

夏の 2 カ月ほど、ノエミとアントニンは避暑地のこの別荘に所員たちと滞在し、仕事に勤しんだ。小高い丘に建つ木造平屋建て。12 角形のスタジオは、中心に親柱となるコンクリート製の暖炉を設け、丸太を組んだ傘構造の屋根が掛かり、構造体は現しとなっている。南側の大きな開口部を開けると外のテラスや自然とつながり、晴れた日は建具をすべて外すこともあった。西にサービスエリアのウィング、東に寝室・和室のウィングが伸び、所員の簡易ベッドが並ぶ別棟も設けた。家具はいずれもノエミのデザインで、襖などに使った和紙は自ら手漉きでつくったものだ。レーモンドの住宅は多くに暖炉が設けられ、それは「家庭の中心」を意味するとノエミは書き残しているが、製図台が取り囲むこの大きな暖炉は「チームの団結」の象徴だろうか。仕事の合間にバーベキューや登山などを楽しむこともあった。



上・スタジオ。かつては暖炉の周りをノエミのデザインによる製図台が取り囲んでいた。下左・南側外観。開口部からつながるテラスがある。下右・和室。襖の和紙はノエミの手づくり。以上 3 点の写真は 2014 年撮影。



箕町の自邸・事務所（6頁）の居間にて。1965年頃。

ノエミ再考： 現代の視点から

中原まり

〈アントニン＆ノエミ・レーモンド展
〈2006-2007年〉共同キュレーター〉

チェコで生まれ育ったアントニン・レーモンドとフランス生まれのノエミ・ペルネッサン。1914年の運命的な出逢いから約60年、二人は夫婦そして建築デザインパートナーとして添い遂げた。

ノエミは十代でニューヨークに移住。コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジで、アーサー・ダウのもとでデザインの基盤を培った。その後イラストレーターとして活躍。ニューヨークの有名新聞社やリリー衛生カップ社などの仕事をこなした。

フランク・ロイド・ライト設計の帝国ホテルプロジェクトに携わるアントニンと共に1919年来日。それを機に彼らの主たる活動基盤は日本に定まる。アントニンが晩年「日本近代建築の父」と呼ばれるまでに至った背景には、ノエミの多大な貢献があったことは言うまでもない。痼癪持ちのアントニンの陰でスタッフの相談相手になることは日常茶飯事、アントニンが施主を維持し得たのもノエミの助力あってのことだった。ノエミのあらゆるものに対する好奇心はアントニンを触発し、より広い世界へと導いた。

ノエミは豊かな感性を持ち、才覚に溢れ、日本の自然や民藝の美をいち早く吸収して、1920年代半ばまでに興味を抱くようになったテキスタイルデザインなどへそれらを展開



居間からフラットに続くパティオで食事を取るのが二人の日常だった。1952年頃。

した。またノエミはアントニンとの協働を通じて、2次元から3次元デザインの世界へと踏み込んでいった。1925年にアントニンへ宛てた手紙の中で、彼女は個人住宅を手掛ける決意を表明している。

動物愛護活動でその名を知られた一方で、ノエミの建築分野への功績が評価されるには時間がかかった。1940年から41年のニューヨーク近代美術館（MoMA）テキスタイル

デザイン競技展覧会出展作のように、後に修正されたとはいえ、それらはよくアントニンの名で紹介されていた。

彼らが生きた時代の建築業界は今以上に男性社会で男女格差も存在した。そんな背景はさておき、自らの名が公表されるか否かはノエミにとって大事でなかったのではないか。彼女は自分の能力に自信を持ち、またアントニンが常にノエミの才能を高く評価し、最大

の理解者で居続けたことに心充たされていたに違いない。アントニンと自分は一心同体、夫の成功のために「奥」として貢献することに美、特に「日本的な美」を感じていたと信じて止まない。

一方、彼らが他界してほぼ半世紀が経ち、女性の立場が大きく変化した今、ノエミの偉業をアントニンとの協働のもとに再評価することは必須であり、かつ意義深い。



ノエミが建築の設計から
インテリアデザインまでを手掛けた住宅は、
十数軒あると推測される。
施主の人間性も汲み取って設計に反映させたノエミ。
レーモンド建築らしく素材そのもののよさを引き出しながら、
省スペースで動線計画に優れ、
造り付けの収納も機能的で美しい——
ここでは、そんな住宅建築から2軒を紹介する。

旧カニングハム邸

(1954年・東京都港区)

左頁・居間を階段から見下ろす。住み手が亡くなったのちに家を保存活用するにあたり、吉村設計事務所が改修を担当した。2001年撮影。上右・居間には、レーモンド建築でおなじみの金属製の暖炉がある。2025年撮影。下左・増築前の外観。

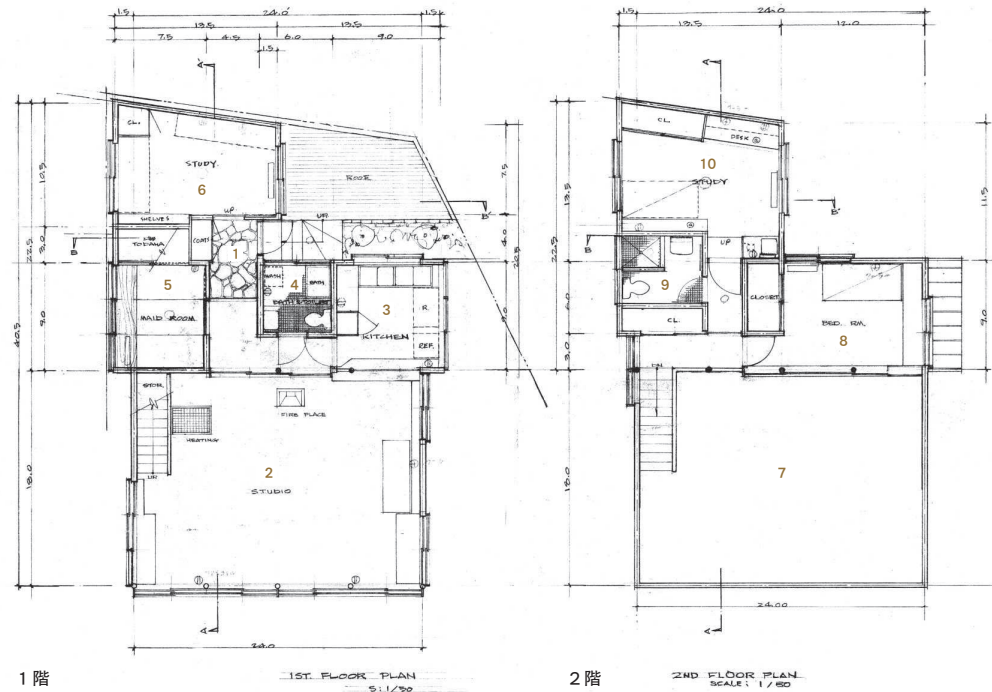


施主のエロイーズ・カニングハム（1899-2000）は、音楽家で音楽教育者。宣教師の両親に連れられて2歳でアメリカから来日し、人生の70年ばかりを日本で暮らした。子どもたちに質の高い生演奏に触れてほしいという思いから、1939年に「青少年音楽協会」を設立する。ノエミとは戦前の日本で知り合った友人関係にあり、二人はともに動物と植物を愛し、戦後は日本人のための社会活動に奔走した。



1941 年からアメリカに帰国していたエロイーズは、戦後まもなく日本に戻り、レーモンド事務所に自邸の設計を依頼する。リクエストしたのは「音楽を聴くバルコニーのある家」。敷地は、麻布・筈町のレーモンド事務所からも近い、根津美術館と隣り合う分譲地だった。ノエミが設計したのは、延床面積 85㎡、木造 2 階建ての小住宅。外観はこぢんまりとして見えるが、中には吹き抜けの大空間が広がり、高い勾配天井を丸太の梁がダイナミックに支える。この空間は音響効果も抜群で、小演奏会で「音楽を聴くバルコニー」となったのは 2 階の寝室。襖を開けると、1 階の演奏者を見ながら音楽を楽しめた。

また、開口部は「芯外し」の手法によって大きく開き、居間と小さな庭はひとつながりとなる。狭い敷地ではあるが、根津美術館の広大な庭園を巧みに借景に取り込み、植物を愛するエロイーズの心を和ませた。壁と天井はラワン合板をそのまま現しとし、築 70 年が過ぎるいまでは、美しい飴色に経年変化している。ノエミの手腕が遺憾なく発揮されたこの家は、高い評価を得て数々のメディアで紹介されたが、それによってエロイーズの活動にも光があたることをノエミは喜んだという。エロイーズはこの家で百歳余りの天寿を全うし、建物はその志を継ぐ「一般社団法人青少年音楽協会」が活用している。



旧カニングハム邸の平面図 1969 年に増築が計画された際の平面図。



旧伊藤邸

(1963 年・東京都大田区)

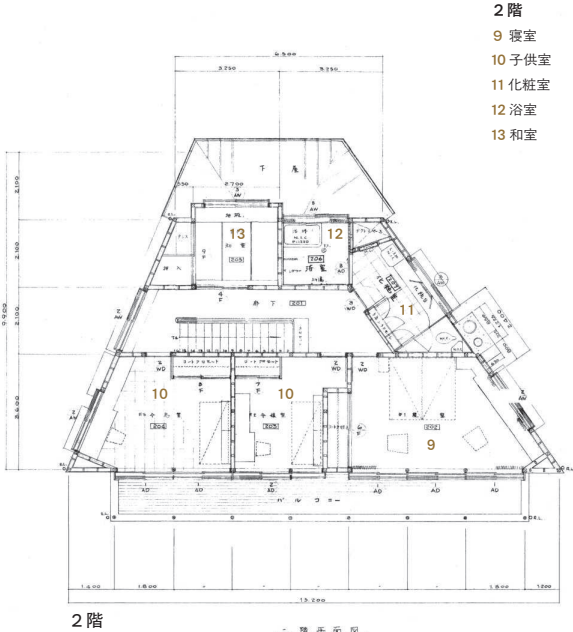
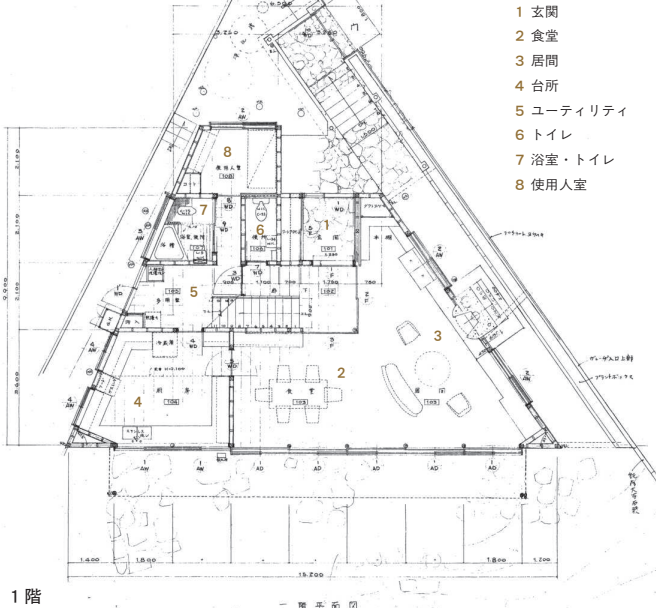
上・旧伊藤邸の居間。障子越しの光が柔らかく差し込み、コンクリート製に漆喰仕上げの暖炉が印象的だ。手前が食堂。2017 年撮影。下右・居間・食堂から玄関を見る。玄関と居間の間には引き戸が入っていたが、後年になって取り外された。下左・暖炉のツールもノエミがデザインした。(旧伊藤邸蔵)





2階の寝室。ノエミは産地を巡って和紙などの工芸品を収集しており、襖の金紙もその一部。壁沿いの造り付け収納は、施主の希望で浅い引き出しを設けた。2017年撮影。

旧伊藤邸の平面図



南側外観。家は高台に建ち、眺望がよい。バルコニーの手すりは幅広につくられていて、飲み物を置いて景色を眺めたいくなる。2017年撮影。



1階の南側にある台所。2025年撮影。

変形敷地に建つこの住宅は、その形状に沿うように、台形に近い平面構成で設計されている。地下に鉄筋コンクリート造のガレージとストレージを設け、1・2階の生活空間は木造。玄関から正面の食堂に入って回り込むと、三角形をした居間が伸びやかに広がる。壁と天井は合板を現しとして使い、障子越しの光が柔らかく差し込む、温もりのある空間だ。開口部は「芯外し」の手法で大きく開放でき、天井高を低く抑え、軒も低くすることで、視線が外へすっと抜ける。動線も練られており、

玄関から台所へのアクセスは、食堂を通る動線のほかに、ユーティリティを通る動線を設けた。これは、食堂・居間に来客があったときに便利だ。ノエミは自らの設計の考えとして「台所は南側に配置する」と書き残しているが、この家はまさにその通りで、大きな窓から景色を望めて風通しもよい。家の随所に造り付け収納が設けられているほか、ノエミのデザインによるさまざまな家具が、修繕を重ねながら現在も大切に使われている（25頁参照）。



ノエミと住宅設計

松下希和

(芝浦工業大学教授、KMKa 建築デザイン事務所)

戦後、ノエミは住宅を設計していた——アントニンが自伝に明記しているにもかかわらず、通常ノエミはインテリア・家具のデザイナーとしてのみ語られ、建築設計に携わっていたことはほとんど知られていない。

テキスタイルや家具の分野では、戦前からノエミのデザインは評価が高く、個展も開催している。当時彼女はレーモンド建築のほとんどの内装を担当していたが、特に住宅のインテリアは住まい手との関係が重要である。優れたコミュニケーション能力で施主の要望を汲み、和洋の生活様式を理解し、住みやすく美しいデザインに昇華させることができたノエミが、内装だけでなく住宅全体の設計へと仕事の幅を広げたのは自然な流れだっただろう。戦前にも設計した例はあるが、本格的

に事務所の住宅設計を担当するようになったのは戦後、事務所の仕事が急増した1950年代初頭のことである。その頃から、ノエミはたびたび「建築家」や「住宅の専門家」としてメディアで意見を発信しており、一定の社会的認知を得ていた。

一方で、レーモンド事務所の仕事の中で、ノエミが全般に設計したと考えられる住宅を特定することは容易ではない。まずノエミがその作品の内装だけを担当したのか、全体を設計したのかを見極めることが難しい。彼女は建築の正規教育を受けることなく、独学で図面の作図をこなしたが、署名はほとんど残っておらず、図面からは判別できない。

手がかりのひとつは雑誌発表の際のクレジットである。本展覧会で紹介している旧カニ



左・旧カニングハム邸の居間。右手の屏風もノエミのデザインで、階段下の収納を隠す役割もあった。右・樓の右手には台所とつながる窓があり、小演奏会のときはここを開けると、バーカウンターに早変わり。カウンターの高さに合わせた折りたたみ式の食卓もある。2階の寝室は、手すりの上下で樓が分かれていて、それぞれ開けることができる。以上2点の写真は2001年撮影。



旧カニングハム邸が掲載された、雑誌『国際建築』1954年11月号（美術出版社）。「設計：ノエミ・レーモンド」と記載されている。（個人蔵）



ングハム邸（1954年・12頁）はノエミが初めて建築設計者として専門誌に掲載された住宅である。手紙からも彼女が設計したことが裏付けられている。同じように雑誌発表のされ方を丹念に見ると、旧伊藤邸（1963年・15頁）をはじめ、十数件の住宅がノエミの設計であると推測できる。雑誌発表された住宅は限定的なので、実際はもっと多いだろう。

旧カニングハム邸も旧伊藤邸も、戦後レーモンド住宅の傑作であるが、それらからノエミ独自の特徴を抽出しようとするのはあまり意味がないかもしれない。単独で設計した住宅であっても、通底する哲学は夫妻の協働から生まれており、彼女の住宅設計についての文章も、施主の住まい方への配慮、庭とのつながり、簡潔性、経済性などアントニンの主張

と重なる。翻って、それはアントニンが示唆したように、ノエミが戦後のレーモンド住宅の多くを形作ったからと言えるのではない。家具、インテリア、住宅、外構——ノエミにはそれらの間に垣根はなく、規模の大小にかかわらず、彼女の才能を必要とした空間をデザインした。我々も垣根を取り払い、彼女のデザインの広がりを見直す時期に来ている。

3章 インテリアと意匠



アームチェア
木・布・い草
W675 × D580 × H895

20～24頁の写真は、箕町の自邸・事務所（6頁）の居間を移築した、レーモンド設計事務所のメモリアルルームで撮影。（20～24頁の家具の所蔵：レーモンド設計事務所）家具の制作年代は、判明しているもののみ記載した。

レーモンド建築において、外部（建築）と内部（インテリア）は優劣なく一体のもの。そしてインテリアの大半をデザインしたのがノエミだった。

家具においては、ヨーロッパ発のモダンデザインの潮流を敏感に汲み取りながら、無垢の木材や鉄といった日本の素材、日本の職人の精巧な技術を生かし、シンプルで機能的なデザインにまとめ上げた。一方、テキスタイルのデザインは、幾何学的な図案に植物や虫などの自然界のモチーフを組み合わせるといった、モダンかつ有機的なものが多い。グラフィックデザイナーとしてのキャリアを持ち、自然をこよなく愛したノエミらしい意匠だ。

ノエミの助手を務めた小林邦子氏が、レーモンド事務所での仕事をまとめた自らのポートフォリオには、ブライス邸（1963年）の平面図に布などのサンプルが貼り付けてある。実際の素材によってノエミの色彩感覚を伝える、貴重な資料である。

左・椅子
木・い草
W470 × D515 × H825
右・椅子
木・い草
W423 × D410 × H755

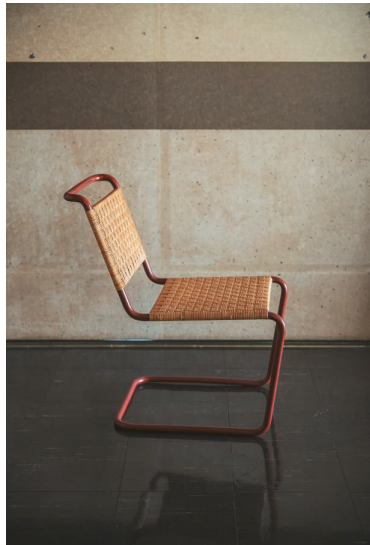
ノエミがデザインした椅子は、縁が細く軽いものが多いが、それを可能にしたのは指物師ほか日本の職人の技術だった。フリーハンドのスケッチを助手が製図し、職人が見本をつくり、それを細く削いでいく方向性で完成させた。釘やビスを使わず、ほぞを入れて組み立てる手法により、華奢でも丈夫である。背や座面には、一般的にはペーパーコードを使いそうなところ、い草をよった縄を編み込んでいるのも特徴的だ。



赤星四郎別邸 アームチェア（1931 年）
丸パイプ・藤皮編み
W600 × D680 × H730

赤星四郎別邸 椅子（1931 年）
丸パイプ・藤皮編み
W425 × D630 × H720
赤星四郎別邸 机（1931 年）
丸パイプ・栗材
W1210 × D675 × H740

パイプを用いた家具は、当時の先進的な建築家がこぞってデザインしており、工業製品に手仕事を組み合わせるのもモダンデザインの潮流だった。日本の職人による藤皮編みが繊細な表情を見せる。なお、写真右に写る照明は、アントニンによるデザイン。



三角椅子（1951 年）
木
W390 × D310 × H440

「乳しぼりの椅子」から着想したスツールで、旧カニングハム邸（12 頁）ほか、レーモンド建築の住宅でよく使われた。座面の穴は手を入れて持ち運ぶためのもので、持ちやすいようにカーブがつけられている。



ソファベッド（1951 年）
ベッド：木 W1950 × D910 × H460
収納：木・和紙 W2300 × D300 × H715

収納から引き出すタイプのソファベッド。自邸の居間を兼ねた主寝室に、縦に2台並べて設置されており、昼はソファ、夜は夫妻のベッドとして使われた。収納には和紙が用いられているのもノエミらしい。カバーのテキスタイルは「プロブズ」（27 頁参照・所蔵：北澤建築設計事務所）。

左・旧カニングハム邸
フロアランプ（1954 年）
パイプ・藤皮巻き・和紙
シェード：φ 510 × H106
支柱：φ 20 × H1400

光源は真横を向くように取り付けられていて、薄く軽やかなシェードとしている。細いパイプの支柱には藤皮が巻かれており、軽くて持ち運びやすい。読書灯としても使われた。

右・アームチェア
木・布
W800 × D700 × H960

布地はオリジナルから張り替えられている。



椅子（1963 年）
木・布・藤
W380 × D360 × H660（座面 490）



アームチェア（1963 年）
木・布 W680 × D770 × H860
オットマン（1963 年）
木・藤 W520 × D380 × H340



※当初、オットマンにはクッションが付属していた。

旧伊藤邸の家具より

ノエミが建築からインテリアまでを手掛けた、旧伊藤邸（15 頁）。
家具は修繕されながら、いまなお大切に使われている。



ローテーブル（1963 年）
木 φ 900 × H390
天板はチェス板をモチーフとしていて、方位も描かれている。

スツール（1963 年）
木
W295 × D285 × H605



ノエミ・P・レーモンドのデザインと日本

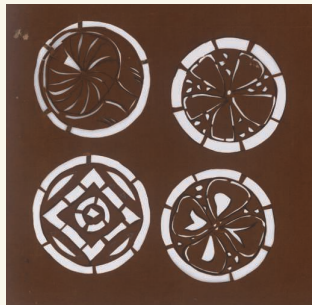
田中厚子（建築史家）



1



2



3

- 1 名称不明、紙にスクリーンプリント、制作年不明。
2 名称不明、紙にスクリーンプリント、制作年不明。
3 名称不明、ステンシルとスクリーン、制作年不明。
1、2の作品の型紙。
(3点の所蔵：Raymond Family, New Hope, Pennsylvania)

1907年からコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジで学んだノエミは、美術教授のアーサー・ウェスリー・ダウから教えを受けている。ダウはボストンでアーネスト・フェノロサから浮世絵などの薫陶を受け、線描・濃淡・色彩で平面構成を解説した『Composition』という本を1899年に出版するほど、日本美術に精通していた。

次にノエミが日本の美術品に触れたのは、アントニンと結婚した後、1916年に半年余り滞在したウィスコンシン州のタリアセンである。そこにはフランク・ロイド・ライトが収集した美術工芸品や浮世絵が溢れていた。ちょうど帝国ホテルの設計が始まる頃で、こ

の滞在が3年後の来日につながった。

1919年末の来日後、ノエミは熱心に日本語や文化を吸収しつつ、アントニンの事務所で家具、絨毯、テキスタイル、暖炉、暖炉用具などをデザインし、和洋の生活を統合する住まいに取り組んだ。和紙、織物、木材など伝統的な素材と職人技は豊富にあった。1936年には、鐘紡サービス・ステーション銀座店で最初の個展「用と美の完全な形態への実験」を開催、竹を用いた燭台、テーブルウェア、テキスタイル、照明器具、化粧台や籐の椅子などが展示された。

ノエミの所蔵品に明治時代の紋様帳^{*1}があるが、テキスタイルはそれらの図柄を応用した

- 4 ノエミがデザインし、山形織通（オリエンタルカーペット）が製作したラグ。作品名「秋の池の蓮」、1930年代の制作。（所蔵：Raymond Family, New Hope, Pennsylvania）
5 ペンシルベニアのレーモンド・ファームでは、4を含む数点のラグがいまでも使われている。
6 1948年頃、シューマッハー社によって販売された。作品名「メッシュと海星（MESH and STARFISH）」、リネンにスクリーンプリント。（所蔵：The Architectural Archives, University of Pennsylvania）



4



5

というよりは、日本の四季の自然の諸様相を取り入れたところにノエミらしさがあると思う。小さな四角が並ぶ「チャイニーズコインズ」、染みのような形が並ぶ「プロブズ」（24頁参照）、円を連続させた「サークルズ」、さらにそれらをベースにして、葦、草、木の葉、花、稲、魚、海星、蝶、トンボ、虫といったモチーフを加えたデザインは、それぞれ魅力的だ。

1940年にニューヨークのMoMAが主催したオーガニック・デザインのコンペでは、「プロブズ」「サークルズ」「葦と草」などのテキスタイルが入賞、翌年の展覧会に出品された。これらはアントニンの名前で発表され

たが、1948年頃からノル社やシューマッハー社で製品化された時はノエミの名になっていた。

戦後は、復興の手助けになるよう日本の陶芸や工芸品の輸出にも協力した。ノエミにとって何より重要なのは本質を捉えることで、「質とは高価を意味せず、精神的なものの、ものの本質的な美を表します。日本人は物のこの本質的な美を世界のどの国の人々よりもよく理解しました^{*2}」と記している。

- 註
*1『廣益以呂波引紋帳案内』安田政常 編集 鈴木萬次郎 印刷・発行（1898年）
*2 ノエミ・レイモンド「簡素な住い方を！」『建築画報』（1954年7月）



6



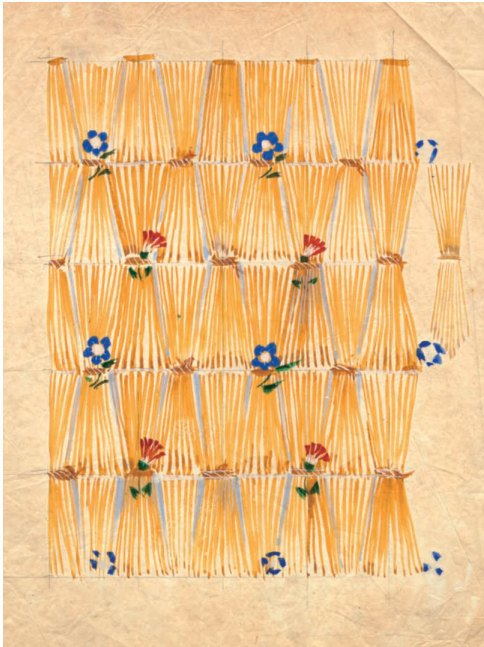
1

1 名称不明、和紙にスクリーン・プリント、制作年不明。
(所蔵：Raymond Family, New Hope, Pennsylvania)



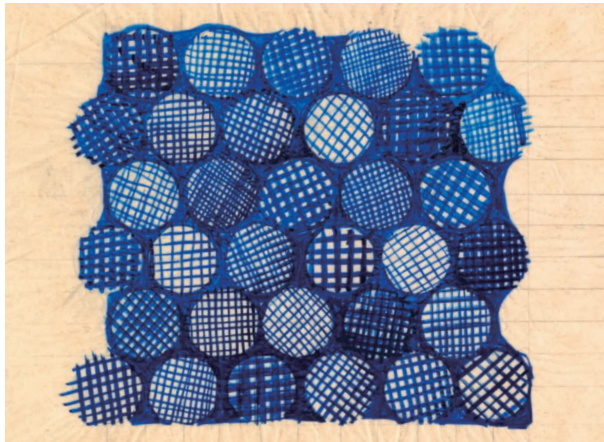
2

4 パターンの習作。トレーシングペーパーにインクと鉛筆、制作年不明。

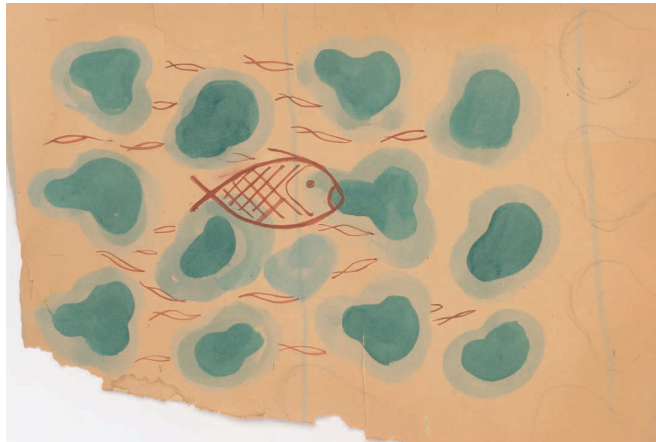


3

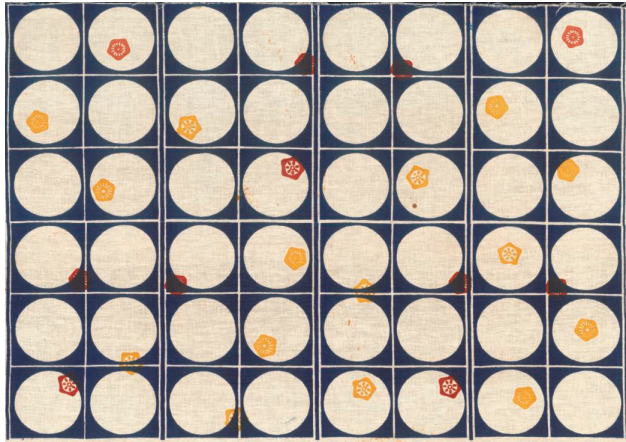
5 パターンの習作。紙に水彩とグアッシュ、制作年不明。
(2、3、4、5の所蔵：The Architectural Archives, University of Pennsylvania)



4



5

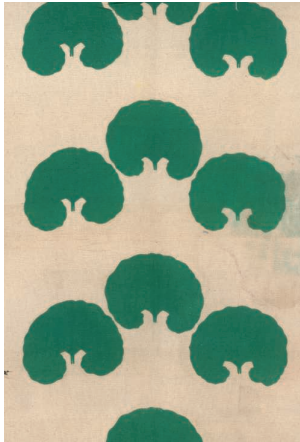


6

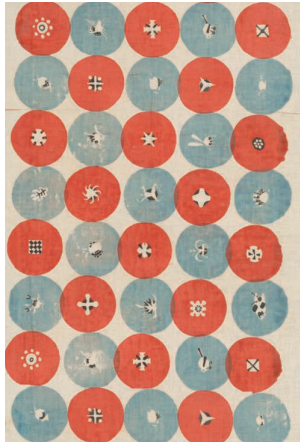
6 作品名「丸に海星 (Circles and Starfish)」、リネン生地にスクリーンプリント。丸の連続模様は1941年にニューヨーク近代美術館 (MoMA) で展示された。これはそのバリエーションで1930～40年代の制作と思われる。

7 作品名「木の葉 (Leaf)」、リネン生地にスクリーンプリント、制作年は1935年頃。

8 名称不明、コットン生地にスクリーン・プリント、制作年不明。



7



8

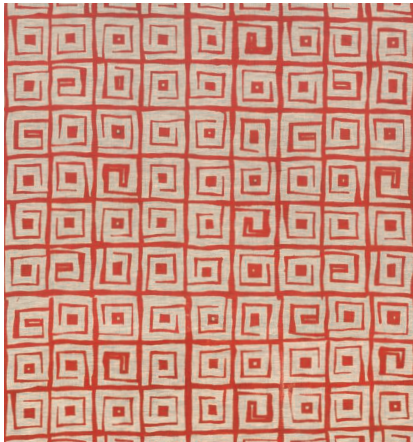
9 名称不明、コットン生地にスクリーン・プリント、制作年不明。

10 作品名「アリーダ (ALIDA)」、リネン生地にスクリーンプリント、制作年は1940年代。

11 作品名「葦と月 (Reeds and Moon)」、リネン生地にスクリーン・プリント、制作年は1930～40年代。バリエーションとして、葦だけの柄や、葦に太い直線をあしらった柄がある。



9



10



11

フランシス・エルバート・ブルックス
Francis Elbert Brooks
-1924
義父。アメリカ人のフランス語教師。1899 年ジュネーブでマリーと結婚。1924 年マサチューセッツ州モントレーで自ら命を絶つ。

マリー
Marie
-1929
母。旧姓Karcher。ジュネーブ出身のカルヴァン派の家系。その祖先には哲学者ジャン＝ジャック・ルソーが含まれていた。

アルフレッド・ペルネッサン
Alfred Pernessin
-1892
父。マルセイユの古いユグノー家系に生まれた銀行家。

ジャンネット・アリソン
Jeanette Allison
異父妹。駐日アメリカ大使となったジョン・アリソンと離婚後、ニューホープに住み、ノエミの活動をサポートする。ノエミが選んだ日本の工芸品を販売する店、Japan Artisansを運営する。

ドリス・レーモンド
Doris Raymond
1931-2025
クロードの妻。6 人の子を育てる。クロードと離婚後もレーモンド夫妻を支え、のちに農場の所有者となる。

ジーン・フランソワ・レーモンド
Jean Francois
1926-2016
息子。愛称クロード。設備技師として働く。

シャーロット・レーモンド（次女）
Charlotte Raymond
孫。写真家。兄にヴィクター、姉にスーザン、妹にレズリー、ジャンネット、クリステイナがいる。現在、ニューホープでレーモンド夫妻の農場とレガシーを継承する、レーモンド・ファーム・センターの共同ディレクターを務める。

神智学協会

セント・クレア・ブレコンス・ラダウ
St. Clair Breckons LaDow
1892-1961
デザイナー。パリの私塾エコール・ド・ラ・グラン・ド・ショミエールで絵画を学ぶノエミと出会い、ノエミは彼女を通じて神智学に触れることとなる。パリ滞在中に、ライトのパートナーであったミリアム・ノエルと知り合う。

ベアトリス・レーン・スズキ
Beatrice Erskine Lane Suzuki
1878-1939
鈴木大拙の妻で神智学者・仏教学者。コロンビア大学大学院に進学し、1906 年、大拙の師・釈宗演の講演で大拙と知り合う。11 年に来日し、結婚。大拙と共に Eastern Buddhist Society を設立。動物愛護運動に熱心だった。

鈴木大拙
1870-1966
仏教哲学者。東京専門学校を出て東京帝国大学に進学。大学在学中に鎌倉円覚寺に参禅し、居士号「大拙」を受ける。柳宗悦は学習院時代の教え子である。

我楽他宗

グルチャラン・シング
Gurcharan Singh
1896-1995
インド人陶芸家。我楽他宗メンバーで神智学者。1919 年に来日し、現在の東工大窯業科にて学ぶ。柳宗悦ら民藝のメンバーとも交流を持つ。20 年にレーモンド夫妻と知り合い、柳、バーナード・リーチ、富本憲吉、濱田庄司の仕事を紹介した。

三田平凡寺
1876-1960
珍品蒐集家。東京の自宅を平凡寺と名づけ、1919 年に我楽他宗を設立。全国から蒐集家や知識人、芸術家が集い、趣味品の交換を行うとともに、伝統と近代、歴史や宗教といった多様なテーマについて語り合い、雑誌を通して発信した。レーモンド夫妻ほか海外出身のメンバーも参加。ノエミは三田から水墨画と書道を習った。

民藝

柳宗悦
1889-1961
思想家。朝鮮陶磁器との出会いをきっかけに、無名の職人が生み出す日常の器や道具に宿る美に目を向ける。各地の手仕事を調査・蒐集する中で、1925 年に「民藝」という言葉を生み出し、民衆的工芸の価値を伝える運動を本格化させた。36 年に日本民藝館の初代館長に就任。

河井寛次郎
1890-1966
陶芸家。1920 年に京都の五条坂に工房・鐘陶窯を構え、初期には東洋古陶磁の技法を生かした作品で注目を集める。柳宗悦と出会い、作風が大きく転換。25 年には柳や濱田庄司らと共に民藝運動の理念形成に関わり、以後はその担い手として多くの工芸家を導いた。

アーサー・ウェスリー・ダウ
Arthur Wesley Dow
1857-1922
画家、版画家、美術教師。アーネスト・フェノロサのもとで日本の浮世絵を研究。コロンビア大学でノエミの指導教員として、彼女の芸術・デザイン観に大きな影響を与えた。

レーモンド

ノエミ・ペルネッサン・レーモンド
Noëmi Pernessin Raymond
1889-1980



ジョージ・ナカシマ
George Katsutoshi Nakashima
1905-1990
建築家、家具デザイナー。日系 2 世。1934 年からレーモンド事務所で聖パウロ教会やインドのゴルフコンダの仕事に従事。帰米後の 42 年に日系人収容施設に拘留され、翌年レーモンド夫妻の支援でレーモンド・ファームへ。戦後ニューホープに家具工房を設立。



杉山雅則
1904-1999
1921 年から 41 年にレーモンド事務所に勤務し、旧赤星鉄馬邸（8 頁参照）等を担当する。41 年以降は三菱地所設計に勤務。48 年にレーモンド事務所が再建されると、三菱地所とレーモンド事務所を半日ずつ勤務する生活を 1 年ほど続けた。

事務所

アントニン・レーモンド
Antonin Raymond
1888-1976



前川國男
1905-1986
東京帝国大学卒業後、パリのル・コルビュジエのアトリエで 2 年学ぶ。1930 年に帰国し、レーモンド事務所に入所。35 年、前川國男建築設計事務所を設立。



吉村順三
1908-1997
東京美術学校（現・東京藝術大学）の学生であった 1928 年からレーモンド事務所でアルバイトをし、31 年の卒業後に所員となる。40 年に渡米し、ニューホープのレーモンド・ファームで約 14 カ月間、レーモンド夫妻と生活を共にしながら働く。41 年、吉村順三設計事務所を設立。



エロイーズ・カニングハム
Eloise Cunningham
1899-2000
音楽家、音楽教育者。2 歳で来日し、生涯をかけて日本の青少年への西洋音楽普及に取り組んだ。ノエミの提案をきっかけに建てた自宅は、旧カニングハム邸として知られる（12 頁参照）。

イサム・ノグチ
Isamu Noguchi
1904-1998
彫刻家。少年期を日本で過ごし、1918 年に渡米。51 年 3 月 28 日から 7 月 5 日、レーモンド事務所が設計したリーダーズ・ダイジェストの造園計画に携わるために来日。レーモンド夫妻は、妻の山口淑子とも交流があった。彫刻や舞台美術、環境彫刻やランドスケープ・デザインなどの広い分野で活動。

フランク・ロイド・ライト
Frank Lloyd Wright
1867-1959
アメリカを代表する建築家。1916 年、ライトの制作と創作の場であるタリアセンにレーモンド夫妻が滞在。夫妻はライトに誘われ、帝国ホテル設計チームのメンバーとして 19 年に来日した。



ミリアム・ノエル
Miriam Noel
1869-1930
彫刻家。ライトとパートナーで、1923 年に結婚したが、まもなく離婚。セント・クレア・ブレコンズ・ラダウの依頼で、レーモンド夫妻をライトに紹介した。

工芸

ブルーノ・タウト
Bruno Julius Florian Taut
1880-1938
ドイツ人建築家。1933 年から 36 年に日本で生活。日本初の国立デザイン指導機関である仙台的商工省工芸指導所で剣持勇らを指導。井上房一郎を通じて群馬県工業試験場高崎分場に着任。34 年に葉山のレーモンド邸を訪れ、同年 9 月には、ノエミが高崎近郊のタウトの住居を訪ねている。アントニンの印象を「商売人気質」と日記に残している。

井上房一郎
1898-1993
高崎の芸術文化を支援した実業家。商工省貿易局嘱託として家具、木工、織物などで指導的役割を果たす。1933 年、軽井沢に開いた家具工芸店ミラテスをノエミが訪れてから、レーモンド夫妻と親交を持つ。52 年、斧町の自邸・事務所（6 頁参照）を模し、高崎に自邸を建設。聖パウロ教会の椅子は井上の高崎木工製作配分組合が受注した。

小川洋吉
デザイナー。1935 年開催のノエミの家具およびテキスタイルの作品展に、製作担当者として協力し、小川製作の織物も展示された。41 年のMoMAの展覧会でも紹介された、アンダーソン&ベラデザインの藤椅子に使用されているノエミデザインの布地は、日本滞在中に小川につくらせたものである。

ジョン・D・ロックフェラー三世
John Davison Rockefeller III
1906-1978
19 世紀末から石油業で財を成したロックフェラー家の三代目。1952 年にロックフェラー財団理事長、ジャパン・ソサエティー会長に就任。日本文化への関心が高く、MoMAでの日本家屋・松風荘の展示と、国際文化会館の設立を提案した。

ブランシェット・ロックフェラー
Blanchette Ferry Rockefeller
1909-1992
ジョン・D・ロックフェラー三世の妻。MoMAの運営と展覧会の国際巡回に携わり、「Japanese Household Objects」展の開催実現にはレーモンド夫妻との親交が大きく関わった。

4章

戦後の教会建築

終戦後の1949年、ノエミとアントニンは東京に事務所を再建し、まずは杉山雅則ほか戦前からの所員たちの力を得て、荒廃した日本各地で精力的にさまざまな建築プロジェクトを実現させていく。やがて手掛けたのが教会建築であり、多くは経済条件も限られた中で、構造やインテリアに工夫が凝らされた。

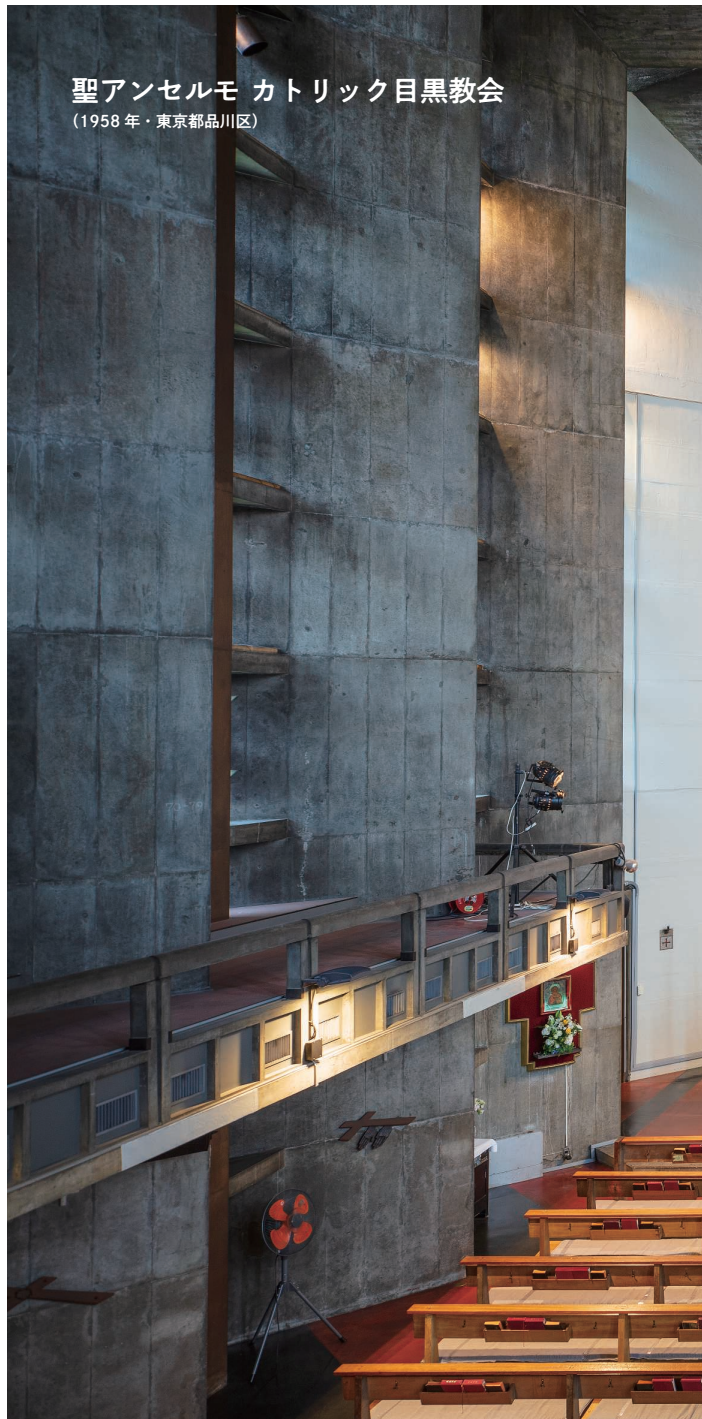
聖アンセルモ カトリック目黒教会は、ノエミとアントニンの共同設計によるもので、担当した所員は増沢^{まこと}洵。狭い敷地に、約500席を有する聖堂、修道院、幼稚園などが建てられた。鉄筋コンクリート造の聖堂の特徴は、長手方向の両側の壁を、ジグザグ状の折板を8スパンで立てる構造としたこと。折板のスリットからは西日が美しく差し込む。

正面の正方形の壁面には、円を重ねた抽象的なモチーフが描かれ、聖壇上のコンクリート製の天蓋は金箔貼りで仕上げて十字架を下げている。アントニンの自伝によれば、この円の壁画は当初、フレスコ画ができるまでの臨時処置だったとのことだが、コンクリート打ち放しのシンプルな空間に荘厳な印象を与えている。

また、聖櫃や燭台などには、鍛鉄や七宝焼といった日本の職人ならではの優れた技術が生かされた。壁面に飾られた14点の「キリストの道行きの祈り像」は、ノエミによるデザイン。何点かは「手」をモチーフとし、「道行き」を象徴的に表現している。



上・「キリストの道行きの祈り像」の1点。鍛鉄と錆鉄が生かされている。
右・聖壇を正面に見る。2024年撮影。





写真はすべて 2025 年撮影。左上・聖壇の上に
登り梁が組まれている。右上・ノエミがデザイ
ンした燭台。右下・和紙の意匠。下・外観。

カトリック新発田教会

(1966 年・新潟県新発田市)

聖堂は、レンガ積み組構造の上に、杉丸太の小
屋組みが載せられたつくり。箕町の自邸・事務所
(6 頁) で確立した、丸太を組んだ鉄状トラス構
造を、よりダイナミックな形で生かした。
聖壇のある六角形のスペースを信徒席が半円形に
取り囲む構成。信徒席の椅子を、ノエミは一人ず
つの祈祷台を持つものとしてデザインし、背と座
面には耐久性のある草を用いた。ガラスには、
札幌聖ミカエル教会(1961 年)と同様、あたか
もステンドグラスのように和紙が貼られているが、
これもノエミによるデザイン。この和紙は、同じ
パターンを使って信徒が貼り替えをし、いまなお
大切に意匠が引き継がれている。



東京聖十字教会

(1961 年・東京都世田谷区)

弧を描く構造材は、飛行機の格納庫のために
開発された、ごく初期の集成材。壁から天井
まで、薄いラワン合板を少しずつ曲げて貼り、
包み込まれるような空間をつくり上げている。
十字架も材木を組んで制作し、内部は素地の
ままとし、経年変化した飴色が美しい。唯
一カラフルなのはファサード側の壁面だが、
これはプラスチック板をスプレーで塗装し、
ガラスで挟んでステンドグラス風にしたもの。
簡素な中にも色彩で温もりを与える、ノエミ
らしい工夫が光る。写真は 2026 年撮影。



カトリック豊島教会

(1956 年・東京都豊島区)

聖堂の内部はコンクリート打ち放し。2 階以上の壁は、聖ア
ンセルモ カトリック目黒教会(32 頁)と同じく、ジグザグ
の折板構造である。折板のスリットは、祭壇を向いた側が色
ガラスのに入った開口部で、光が差し込むと向かい合う壁を照
らし、ドラマチックな表情を見せる。祭壇の天蓋はコンク
リート製で素地のまま。外観はもともと、コンクリート打ち放
しの壁に正方形のグリッド線が浮かび上がるものだったが、
後年になって白く塗装された。写真は 2024 年撮影。





1924年の『東京朝日新聞』の記事より。馬の愛護を訴えるポスターを、ノエミは設計事務所のスタッフと共に手づくりした。

社会のために

松下希和（芝浦工業大学教授、KMKa 建築デザイン事務所）

ノエミが比類なきエネルギーと愛情を注いだ対象は、事務所における設計の仕事にとどまらなかった。所員から「動物愛護のおばあちゃん」というあだ名を付けられた彼女は無類の動物好きで、何匹もの野良犬を拾って飼っていた。自然を愛し、植物に詳しく、暇さえあれば、犬を連れて野山を何時間も散歩した。困っている友人がいれば相談に乗り、物心ともに面倒を見た。その精神は社会的なスケールでも発揮された。戦前も来日後すぐ日本人道会の理事に就任。「愛馬ポスター」をデザインして動物愛護を訴え、映画鑑賞会を開催して資金調達をした。戦後、日本に戻ったノエミは焦土と化したこの国の姿に愕然とする。そして、すぐさま援助活動に立ち上がった。アメリカの婦人会を中心に協力を募り、植樹活動や孤児院の子どもに寄付をしてまわる。小学生が教科書を買えないと聞けば、文部省に働きかけて教科書の無償化に取り組み、九州の炭鉱労働者の苦境を聞けば、米軍と協力して物資を送った。事の軽重を問わず、自分が正しいと思うことに情熱をかける。ノエミは行動の人だった。

それらの中でノエミが最も力を注いだのは、彼女が愛した日本の工芸の伝統と技術を守るため、それを担う職人たちへ経済的な支援を行うことだった。1951年にニューヨークのMoMAや東京のリーダーズ・ダイジェスト社屋で開催した展覧会で、自ら収集した日本の器物を紹介しただけでなく、妹のジャネットと共同でペンシルベニア州ニューホープに「Japan Artisans」という工芸品を販売する店を開いた。ノエミは多くの時間を割いて陶磁器、籠、布、着物、紙などの商品の調達のために日本各地を回っている。新しい素材の発見やデザインの発想につながった、この工芸の「発掘」の仕事は、職人を支援しただけでなく、ノエミにも大きな喜びをもたらす活動だった。



左上より時計回りに／左頁の新聞記事の写真。保護して飼っていた愛犬と愛猫と一緒に収まる／ノエミが焼いたと伝わる器。ノエミは濱田庄司に陶芸を習っていた（所蔵：レーモンド設計事務所）／家族の写真アルバムの一枚。彼岸花のような花が写る／スケッチブックに残された、植物を描いたと思われる絵（所蔵：The Architectural Archives, University of Pennsylvania）

Interview_1

自然そのものといった人

シャーロット・レーモンドさん

(ノエミ・レーモンドの孫、写真家、レーモンド・ファーム・センター共同ディレクター)



人間味のあるデザイン

ノエミは祖父アントニンと並んで仕事をしながら、家のことをすべて取り仕切っていました。家族やお手伝いさん、お客など、誰に対しても心配りができたのですが、それは祖父がさほど得意ではないことでしたね。だからこそ彼女は、家族が円滑に心地よく暮らせる工夫を住宅設計に凝らせたのだと思います。教会や大学の仕事において

も、ノエミがデザインするものは、たとえコンクリートのベンチでも柔らかいんですよね。人間味があって、細やか。それがノエミのデザインの特徴ではないでしょうか。

祖父アントニンとの関係性

祖父母はとても仲がよく、ほとんどいつも一緒にいました。祖父は厳格な人で、外出時にはきちんとした服装をしていましたが、祖母は適当でした。あるパーティーに出掛けたときも、ノエミは普段と変わらない格好をしていて、アントニンは「化粧を直してきてよ」と言ったそうなのですが、お化粧室から笑顔で戻ったノエミのメイクはたいそう雑で（笑）。しかし彼女はまったく動じず、自信に満ちていたそうです。アントニンは、ノエミの前では正しくある必要がありませんでした。祖父が所員たちのミスを厳しく叱っても、祖母は彼らを慰めて励まし、請負業者やクライアントに対して、いつも和らげ役でした。祖父は自分の大きなアイデアを実現するためにノエミを必要としていたのだと思います。

唯一の欠点

彼女は優雅で、面白く、遊び心があり、喜びに満ちていましたが、時にはとても真剣でした。そしてノエミの芸術は私の想像を

超えています。家庭を運営し、さまざまな困難を乗り越えながら、どうしてこんなことを成し遂げられたのだらうと思いますが、そうして完璧であることは苦しくもあり、だからこそ彼女にはユーモアの感覚が必要だったのかもしれないね。唯一の欠点は料理の腕で、レーモンド・ファームで彼女が料理を担当した時期は、スタッフが次々と辞めてしまったほどです（笑）。

自然から得ていたこと

ノエミはとても精神的な人で、家族は皆、彼女は自然そのもののだと言います。食後によく、家族で何マイルも野原を歩いたものですが、彼女は枯れた草や若草、花のかすかな色にも目を留めていました。それが絵やテキスタイルに取り入れたい自然の色であり、彼女のインスピレーションの源はつねに自然の中にあったのです。あるときノエミが「逆さまになって景色を見てごらん」と。色彩が変わり、空気の感じも変わり、雲が下にある様子さえも、喜びを感じさせてくれました。彼女と一緒に自然に触れながら歩く時間は、私の一番好きな時間でした。彼女は野原で最も美しい色を見つけ、私たちには見えない鳥の声を聞き分けていました。おそらくそれが、彼女との一番の思い出です。

Interview_2

動線と機能性、そして心地よさ

金井美加さん（旧伊藤邸の現在の住み手）

河津あつ子さん（三日月デザインオフィス代表）

この家との関わり

金井 もともととは、夫の祖父母（伊藤廣二さん・喜美子さん）が建てて住んでいた家で、祖父母が他界したあと、受け継いだ義母（金井純さん）が、旧知の河津さんに改修をお願いしたんです。義母にとって思い入れのある家なのですが、自身は海外暮らしで住むことができない。私たち家族が海外生活から戻ったタイミングだったので、「住むことで家を守っていきましょう」という話になりました。

河津 純さんの弟の真さんと中学生時代から仲良しで、たびたび遊びに伺っていました。リビングのソファの周りに若者たちを集めて、おじさまが「今日は何をテーマに話をする？」と言っていらしたことを懐かしく思い出します。長いお付き合いの中でこのお家を体験したことが、私が建築やデザインの仕事に就いた原点となったと思っています。



家づくりについて伝え聞いていること

金井 夫の祖母はモダンな人で、西洋のライフスタイルに興味があったようです。たくさんジュエリーや小物を持っていたので、それを収めやすいように、浅い引き出しが並ぶ造り付け収納をお願いしたと聞いています。

河津 三角に近い変形敷地なので、「それに合わせて台形の家にしたらいいんじゃない？」って提案したのは喜美子さんだったそうです。設計は基本的にノエミさんにお任せだったけれども、喜美子さんから、キッチンには25cmのディナープレートが入る食器棚を付けたいと頼んだとか。そういう細やかなことは、ノエミさんには話しやすかったのではないかしら。

特にいいなあとと思うところ

金井 ここは東京の中でも高台に位置するので、バルコニーから庭や遠くの景色が見晴らせるのがとてもいいんです。それからキッチンの窓が大きくて、鳥や蝶がすぐ目の前にやってくる。東京でありながら、避暑地にいるような感覚があります。

河津 動線がすごくいいですね。回遊性があって、キッチンへはリビング・ダイニングからも入れるし、後ろからユーティリティを回って入ることもできるし。あとは、障子の光の柔らかさと明るさ、開口部の低



さ。引き戸を多用して、ドアとうまく使い分けているところ。動線と機能性、それから心地よさが、全部ほどよい具合にできていて、体にすっと入ってくる優しさみたいなものがありますね。

これからも住み続けていくために

河津 60年前の家ですから、気密性や断熱性については現代の家とは違っています。2017年に行った改修では、家のもとの姿を維持することをめざしながら、屋根裏に断熱材をたくさん入れるなどして温熱環境を改善しました。家は手入れを細かく重ねていけば長持ちするものですし、それを若い方が続けてくださったら、とてもうれしいなあと 생각합니다。

金井 もともとの家具などに、自分たちが使ってきたものを合わせて住んでいます、いびつな印象にならないように心掛けています。河津さんのおっしゃるように、この家には機能性と居心地のよさがあって、古めかしくない。改修を終えてからは、ストレスなく過ごせています。これから先、どうしたら長く維持できるのか……簡単には答えは出ないのですが、考えていきたいと思っています。



年代(年齢)		主な出来事	レーモンド事務所の主な作品（●建築/■刊行物/○展覧会） ※本展で紹介する建築は赤字で記し、ノエミが設計したと考えられる建築は*で示した。
1888		5月10日、アントニン・レーモンドが現チェコ共和国のクラドノに生まれる。	
1889	0	6月25日、ノエミ・ベルネッサンがフランスのカヌヌで生まれる。	
1900	11	母マリーとその再婚相手フランシスと共にニューヨークへ渡る。	
1901	12	フランシスが勤めるホレイス・マン・スクールに入学。学校の年鑑の共同編集者として、絵画や風刺画の才能を発揮。 コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジの2年制美術課程に入学。指導教員の一人に画家のアーサー・ウェスリー・ダウがいた。	
1907	18		
1909	20	パリへ渡り、エコール・ド・ラ・グランド・ショミエールで絵画を学ぶ。翌年ニューヨークへ戻ったのち、グラフィックデザインスタジオを開設。演劇ポスター、広告、挿絵の制作を行う。	
1914	25	8月、ナポリからニューヨークへ向かう船上でアントニンと出会い、12月にニューヨークで結婚。	
1915	26	ノエミの友人を通じ、アントニンが翌年からフランク・ロイド・ライト事務所で働くことが決まる。	●東京女子大学総合計画（東京）
1916	27	タリアセンでライトと共に生活・制作する。二人はライトによるタリアセン再設計案を描いた木版画を制作し、彩色はノエミが手掛けた。翌年1月にニューヨークへ戻る。	
1919	30	陸軍駐在官としてジュネーブに赴任していたアントニンが除隊し、ノエミと共にニューヨークへ戻る。 ライトより帝国ホテル建設のため東京へ同行する依頼があり、ノエミとアントニン、ライトとミリアム・ノエルは12月31日に横浜に到着する。 アントニンはライトのスタッフとして帝国ホテルの設計に取り組む。 アントニンはライトの事務所を退職し、Lスラックと東京・有楽町に事務所を構える。ノエミとアントニンは品川区の小さな日本家屋に移り住む。 ノエミの最初の論考『Tokyo's Hermit Crabs: Our Artistic Immorality and Decorative Barbarity』が『ファー・イースト』に掲載される。	●東京女子大学総合計画（東京）
1922	33		●東京ローンテニスクラブ（東京）
1923	34	関東大震災により、自宅が失われる。 ノエミは12月から4カ月ほどニューヨークへ渡り、在日米国外使館設計の可能性について協議する。	●福井菊三郎邸（東京） ●フランス大使P・クロードル臨時住居・事務所（東京）
1924	35		●星商業学校（東京）
1925	36	2月、第一子が東京の聖路加国際病院で誕生するが、3月23日に亡くなる。 アントニンは、事務所の新たなパートナーとしてA.サイクスを迎える。	●霊南坂の自邸（東京）
1926	37	出産のため、ノエミは1月にニューヨークへ。3月に長男ジーン・フランソワ（愛称クロード）が、ニューヨークで誕生。6月に母は横浜に到着し、一家は東京・霊南坂に新築されたばかりの自宅に落ち着く。 A.サイクスが事務所を退職。アントニン・レーモンド建築事務所に改称。	●浜尾子爵夫人別邸（東京） ●ライジングサン石油会社ビル（横浜）／スタンダード石油会社ビル、社宅群（横浜） イタリア大使館日光別邸（栃木）／ソヴィエト大使館（東京）
1927	38		●赤星四郎別邸（神奈川）／トレッドソン別邸（栃木）
1928	39		●東京ゴルフクラブ（埼玉） ●赤星喜介邸（東京）
1931	42		●夏の家（長野）／教文館・聖書館ビル（東京）
1932	43	約4カ月の世界一周旅行に出発する。タリアセンではライトと再会し、パリではフランス大使館のための家具をノエミが選定する。プラハとジュネーブに住む家族を訪問した。	●赤星鉄馬邸（東京）／川崎守之助邸（東京） ブラジル・コーヒーショップ内装（教文館内）（東京） 聖母学院体育館および講堂（大阪） ●聖パウロ教会（長野） ■『アントニン・レイモンド作品集』（城南書院） ●不二家レストラン（横浜）
1933	44	銀座の教文館・聖書館ビルへ事務所を移転。	○展覧会「レーモンド建築事務所作品写真展覧会」（東京・資生堂ギャラリー）
1934	45		●東京女子大学チャペル・講堂（東京）／フォード自動車工場計画案（横浜） ●ゴルフコンダ（インド） ■『Antonin Raymond Architectural Details（アントニン・レーモンド 建築詳細図譜）』 ※1948年再版
1935	46	ノエミの論考「インテリア・デコレーションについての断想（Some Random Thoughts on "Interior Decoration"）」が『建築知識』に掲載される。	
1936	47	「レーモンド夫人意匠作品展：用と美の完全なる形態への実験」が銀座の鐘紡サービス・ステーションで開催され、家具やテキスタイルが展示された。	
1937	48		
1938	49	戦況によりレーモンド一家は日本を離れ、インドで6か月間の現地作業に従事。途中、上海やアンコール・ワットを訪れる。 8月、ノエミとクロードはジュネーブに滞在。アントニンはプラハで家族と最後の再会をする。	



1939	50	アントニンはニューヨークで事務所を開設。 ペンシルベニア州ニューホープに150エーカーの農場を購入し、改修に着手する。	●ストーン邸（ニュージャージー）／レーモンド・ファーム（ペンシルベニア） ○展覧会「Antonin Raymond: His Latest Work in Japan and India」（ニューヨーク ロックフェラー・センター） ■アメリカ版『Antonin Raymond Architectural Details』 ●斎藤博駐米大使記念図書室計画案（ワシントンDC） ●カレラ邸（ニューヨーク） ○展覧会「Organic Design in Home Furnishings」（ニューヨーク・MoMA）
1940	51		
1941	52	ニューヨーク近代美術館（MoMA）主催のコンペ「Organic Design in Home Furnishings Competition」のプリント・ファブリック部門で最優秀賞、さらに「ワンルーム・アパートのための家具」で入賞する。受賞作の布地は、9月に同名の展覧会で展示され、少量生産・販売された。 東京の事務所を閉鎖する。 アントニンは軍事関連の大規模プロジェクトを専門とする、タトル・シーリー・ブレース&レーモンド事務所をニューヨークに開設（45年まで）。	
1942	53		
1946	57	レーモンド&ラド建築事務所をニューヨークに開設。	
1948	59	アントニン戦後初来日。 この頃、ノル社でノエミデザインのテキスタイルの製品化が始まる。	
1949	60	10月、アントニンが再来日し、リーダーズ・ダイジェスト建設予定地内の仮設建物に、東京事務所を再開する。12月、ノエミが戦後初来日。	
1950	61	4月、夫婦でアメリカへ戻り、10月にアントニンののみ日本へ渡る。	●● 荻町の自邸・事務所（東京） ／スタンダード石油社宅（横浜および東京） リーダーズ・ダイジェスト東京支社（東京）／日本楽器ビル・ヤマハホール（東京） ○展覧会「Japanese Household Objects」（ニューヨーク・MoMA） ○展覧会「現代日本陶磁展」（リーダーズ・ダイジェスト東京支社） ●アメリカ大使館宿舎（ペリーハウス）（東京） ●井上房一郎邸（群馬）
1951	62	麻布・弁（こうがい）町に自宅兼事務所が完成。 1月からノエミがMoMAの展覧会準備のためニューヨークに滞在。 3月、在日米国外使館職員住宅計画の敷地内の仮設バラックへ事務所を移転。 5月、ノエミが二度目の来日。 5月から9月までノエミは滞米。 10月に息子一家が来日（55年まで）。	
1952	63	12月、アントニンがリーダーズ・ダイジェストで日本建築学会賞を受賞。	●MGM東京フィルム事務所（東京）／アメリカ大使館宿舎（ハリスハウス）（東京） クロード・レーモンド邸（東京）／速田邸（東京） ● カニングハム邸（東京）* ／原田邸（東京）*／安川電機本社ビル（福岡）
1953	64	二人はアメリカ、メキシコ、ヨーロッパを旅行し、翌年4月に東京へ戻る。	●山下邸（東京）*
1954	65	カニングハム邸竣工。ノエミが初めて設計者として『国際建築』『モダンリビング』などに発表される。 Japan Timesに特集『Designer Noemi Raymond, Woman of many talents』が掲載される。	● カトリック豊島教会（東京） ／八幡製鉄体育館（福岡）
1955	66		● 聖アンセルモ カトリック目黒教会 ／葉山の別邸（神奈川）
1956	67	二人は2月から10月の間、アメリカに滞在。12月から翌年9月までノエミは再度アメリカに渡る。	
1958	69		
1959	70		●伊藤邸（東京）*／川崎邸（東京）*／山下豊郎邸（東京）* 国際キリスト教大学（I.C.U.）総合計画（東京）／聖オルバン教会（東京） ●イラン大使館（東京）／ケステンバウム邸（東京）* ● 聖十字教会（東京） ／ 札幌聖ミカエル教会（札幌） 白石邸（東京）*／群馬音楽センター（群馬） ■「The Works of Antonin Raymond」『Architectural Association Journal』（特集号） ● 伊藤邸（現・金井邸）（東京）* ／ 軽井沢の新スタジオ（長野） ● ブライス邸（兵庫） ／立教高校聖パウロ礼拝堂（埼玉）／東京ゴルフクラブ（埼玉） ●神言修道院（東京）／南山大学総合計画（名古屋） ●立教高校教員住宅No.4（埼玉）* ● 足立別邸（長野）* ／ 南山大学神宮神学院（名古屋） ● カトリック新発田教会（新潟） ■『私と日本建築』（鹿島出版会）
1960	71	スペイン、ポルトガル、フランス、スイス、イタリア、ギリシャ、トルコを旅行。	●イスラエル大使館（東京） ○展覧会「アントニン・レーモンド展」（東京 銀座松坂屋） ■『自伝アントニン・レーモンド』（鹿島出版会） ■『現代日本建築家全集1. アントニン・レーモンド』（三一書房）
1961	72		
1962	73		
1963	74	ノエミが設計した大田区の伊藤邸が竣工。	■英語版「Antonin Raymond: An Autobiography」
1964	75		
1965	76		
1966	77	ノエミが設計した足立別邸が竣工。	●ニューホープのスタジオ（ペンシルベニア） ○展覧会「Hommage à Antonin Raymond」（東京・吉井画廊）
1967	78		
1969	80		
1970	81	アメリカ、アイルランド、フランス、スイスを旅行。	
1971	82		
1972	83	8月、二人はアメリカへ渡航し、翌年1月に日本へ戻る。	
1973	84	二人は日本を離れ、ニューホープに設計したスタジオへ移り住む。建築実務から正式に引退する。	
1974	85		
1976	87	10月25日、アントニンがペンシルベニアのセント・メアリーズ病院にて、88歳で逝去。	
1980	91	8月19日、ノエミがニューホープにて、91歳で逝去。	





左上から時計回りに／22～24頁掲載の椅子を展示（所蔵：レーモンド設計事務所）／型紙など、紙の作品の展示コーナー／1960年代、ノエミは孤児院などへの寄付活動のために、端材の銀板を用いて首飾りをデザインした。これはその試作品で、事務所のパーティーで所員の梶本尚揮氏が引き当て、大切に保管してきた（3頁参照・所蔵：梶本尚揮）／旧伊藤邸模型（制作：芝浦工業大学 松下希和研究室）／旧カニングハム邸模型（制作：神奈川大学 鈴木信弘研究室）／カトリック新発田教会の信徒用の椅子。左は試作品で、背の折拂台の部分にノエミが鉛筆で描いた線が残る（所蔵：カトリック新発田教会）



ノエミ・レーモンドの建築と意匠

和で紡ぐモダンライフ

Noémi P. Raymond's Architecture and Design: Inspired by Japanese Aesthetics

2026年3月19日（木）－6月18日（木）

主催・企画 公益財団法人ギャラリーエークウッド
岡部三知代/徳平 京/西田千秋/
山口朗徹/真鍋頼子/風富嘉津美/北原英雄

協力 レーモンド設計事務所、北澤建築設計事務所、
山形綴通（オリエンタルカーペット株式会社）、
Raymond Farm Center for Living Art & Design、
The Architectural Archives, University of Pennsylvania、
一般社団法人青少年音楽協会、吉村順三記念ギャラリー、
カトリック新発田教会、金井美加、河津あつ子、小林邦子、梶本尚揮、
芝浦工業大学松下希和研究室、神奈川大学鈴木信弘研究室

企画協力 シャーロット・レーモンド、田中厚子、松下希和
後援 江東区、チェコセンター東京
会場制作 株式会社エヌテック

アドバイザー 酒井忠康（元世田谷美術館館長）
木下直之（静岡県立美術館館長）
和氣雅子（株式会社AWP代表）

パンフレット

発行 公益財団法人ギャラリーエークウッド
編集 北川史織
デザイン 宮古美智代
印刷 望月印刷株式会社

関連イベント

トークショー
「建築家そしてデザイナー、ノエミ・レーモンドを語る」
日程 2026年3月19日（木）16:00-18:00
講師 小林邦子（元ノエミ・レーモンド助手）
シャーロット・レーモンド（写真家、レーモンド・ファーム・センター共同ディレクター）
田中厚子（建築史研究者）
松下希和（芝浦工業大学教授、KMKa建築デザイン事務所）
ファシリテーター 岡部三知代（ギャラリーエークウッド館長）

トークショー

「アントニン&ノエミ・レーモンド建築の保存と継承」
日程 2026年4月24日（金）16:00-18:00
講師 ケン・タダシ・オオシマ（ワシントン大学建築学部教授）
岸 佑（国際基督教大学アジア文化研究所研究員）
松隈 洋（神奈川大学教授、京都工芸繊維大学名誉教授）
三浦敏伸（レーモンド設計事務所取締役会長）
ファシリテーター 松下希和（芝浦工業大学教授、KMKa建築デザイン事務所）

※場所はいずれも東陽町ぐりんたす2階ホール（東京都江東区南砂2-5-14）

写真・図面

シャーロット・レーモンド（撮影）
表紙、13頁右、17頁下右、27頁上右、32頁、
33頁、35頁下2点
碓波周平（撮影）
2頁、5頁右下、20頁、21頁、22頁、23頁、
24頁、34頁、37頁上右
合資会社堀商店（提供）
2頁、34頁
光齋昇馬（撮影）
4頁、5頁上中、15頁下左、18頁、25頁、
35頁上2点、42頁
Raymond Family, New Hope, Pennsylvania（提供）
5頁上左・右中、36頁、37頁上左・下右
齋部 功（撮影）
5頁下左、
北澤建築設計事務所（提供）
6頁、7頁、8頁、10頁、11頁、13頁左、
15頁下右、16頁下、30頁（ノエミ）、
31頁（アントニン）
©村井 修（写真）
画像提供：村井久美（村井 修 写真アーカイヴス）
6頁下2点、13頁左
山田脩二（撮影）
7頁下右
齋藤さだむ（撮影）
9頁

渡辺義雄（撮影）
写真原板所蔵：日本写真保存センター
10頁、30頁（ノエミ）、31頁（アントニン）
Francis Haar（撮影）
11頁
野中昭夫（撮影）
12頁、19頁
泰文館『住む。』創刊号（提供）
12頁、19頁
レーモンド設計事務所（所蔵）
14頁、17頁上、30頁（ジョージ・ナカシマ）、
31頁（前川國男）
河田弘樹（撮影）
15頁上、16頁上、17頁下左
杉山雅則旧蔵資料
30頁（杉山雅則）
個人蔵
31頁（吉村順三）
The Frank Lloyd Wright Foundation Archives
(The Museum of Modern Art | Avery Architectural &
Fine Arts Library, Columbia University, New York)（所蔵）
31頁（フランク・ロイド・ライト）
一般社団法人青少年音楽協会（提供）
31頁（エロイーズ・カニングハム）
公益財団法人濱田庄司記念益子参考館（提供）
31頁（濱田庄司）

古い写真の掲載にあたっては、撮影者を調査し、可能な限り承諾を得ておりますが、撮影者不明のものがあります。
心あたりがあれば、ギャラリーエークウッドまでご連絡ください。

主要参考文献

『自伝アントニン・レーモンド 新装版』アントニン・レーモンド著 三沢 浩 訳（2007年・鹿島出版会）
『女性が建てた家と間取り』田中厚子・松下希和 著（2025年・エクステレッジ）
『アントニン・レーモンド チャーチ&チャペル 日本』
石原秀一 編集 内藤恒力・土屋重文 執筆 宮本和義 写真（2013年・バナナブックス）
『CRAFTING A MODERN WORLD: THE ARCHITECTURE AND DESIGN OF ANTONIN AND NOÉMI RAYMOND』
Kurt Helfrich・William Whitaker 編集（2006年・Princeton Architectural Press）
『建築と暮らしの手作りモダン アントニン&ノエミ・レーモンド』
太田泰人・三本松倫代（神奈川県立近代美術館）編集（2007年・Echelle-1/美術館連絡協議会）
『JA』33号（1999年・新建築社）
鈴木敏彦 著『ノエミ・レーモンドの美しい暮らしのデザイン』『家具道具室内史』第13号
（2021年・家具道具室内史学会誌）

公益財団法人ギャラリーエークウッド

136-0075 東京都江東区新砂 1-1-1 竹中工務店東京本店 1F
Tel: 03-6660-6011 Fax: 03-6660-6097
Email: gallery@a-quad.jp

公式HP
https://www.a-quad.jp

©2026 GALLERY A⁴

本書の一部または全部を複製、転載することを禁じます。





GALLERY A⁴